

はじめに みたそのさとし 三反園訓の、ニュースな一日

「お疲れさまでした」

ニュースステーションの中継が終わるとほっとひと息、私は必ず国会記者会館のソファアに腰掛ける。至福のひとつときだ。しかし、これで仕事が終わったわけではない。ニュース番組はニュースステーションだけではないのだ。朝ニュースの原稿が待っている。たくさんの政治部員が夜、それぞれ担当する政治家の家へ行き情報を取ってくる。その情報を分析して、朝ニュースの原稿を書くのだ。あすの政局はどう動くのか、しっかりとした確実な情報がある時には原稿を書くのは簡単だが、そうではない時は頭を悩ますことになる。最終的に原稿が出来上がるのが午前1時を過ぎていることはよくある。

朝は午前10時には国会記者会館に出勤する。なぜかという、昼ニュースがあるからだ。午前11時45分からニュースは始まる。それまでに原稿を入れなくてはならない。まず、新聞各紙に目を通すことから一日が始まる。そして、昼ニュース前になると、政局が動いている時は電話がなりっぱなしで戦争状態となる。自分で原稿を書く時もあるが、中堅、若手の記者に原稿を依頼す

る場合もある。そういう時は原稿をチェックするのが私の仕事になる。午前11時45分から逆算してどれくらい我慢できるか、つまり、若い時は原稿の出来上がりが遅く必ず放送のぎりぎりの時間となるものだ。放送には間に合わせないといけない。原稿を直す時間も必要だ。原稿を書くほうも必死だが、その出来上がりを待つほうも緊張感に包まれる。我々の仕事はいつも時間に追いつてられる。負けが許されない時間との勝負だ。

アナウンサーはなぜ黙ってしまったのか

昔、こういうことがあった。今は原稿はパソコンで入力し、それを打ち出す。しかし、それまでは手書きだ。手書きとなると、当然だがきれいな読みやすい字もあれば、読みにくいくせ字もある。

くせ字と出くわすと読むアナウンサーは大変だ。放送の前に必ず下読みを行う。私の先輩でくせ字の人がいた。その人の書いた原稿が放送時間ぎりぎりになり、下読みができないままニュースが始まったのだ。アナウンサーはその原稿を見てびっくり。追い込み原稿だったこともあり、くせ字の上に書き殴りの原稿だったのだ。読み出した。最初のうちはつつかえつつかえ読んでいたが、アナウンサーの顔がこわばったかと思うと急に黙ってしまった。原稿がまったく読めないのだ。画面には絵だけが流れる。音はない。結局、最後まで読めずに終わってしまった。終わった瞬間、スタジオは静まり返った。私も啞然として、その場面を見ていたが、視聴者はそのニュ



▶ 国会記者会館にて

ースがどうい内容なのか当然だがまったくわからなかったと思う。そして、なぜ、アナウンサーが黙ってしまったのかも……。

話を私の一日に戻そう。昼ニュースが終わると昼食の時間だ。何時から何時までと昼休みの時間があるわけではない。いつでも電話がかかってくる。休み時間はない。仕事の延長線上のなかでの昼食だ。政治家との昼食会がある時もあるが、いつもは国会記者会館の1階にある食堂に注文してA Dの落合さんにとってきてもらう。10分程度で昼食を済ませると、社のデスクと夕方二ニュースの打ち合わせだ。どれくらい時間をとり、どういう切り口で伝えるかを話し合う。

テレビ朝日の夕方二ニュースは、午後5時50分から始まるスーパーJチャンネルだ。小宮悦子さんがキャスターを務めている。この夕方二ニュースまでの時間は取材の時間だ。国会議員の執務室である国会議員会館に出かけて行く。国会議員会館は国会記者会館のすぐ隣

にある。そこで政治家に直接会って情報を仕入れるのだ。実際に自分で取材したほうが原稿も書きやすい。

国会記者会館と国会議員会館と国会議事堂は地下通路で結ばれている。だから雨の日でも濡れないで移動できるようになっている。

今は携帯電話の時代。どこへ行ってもいつも電話が追っかけてくる。じゃんじゃん電話が記者からかかってくる。電話がない世界へ行きたいと思う時もしばしばだ。

また、議員の部屋を梯子はしこしていると、どの部屋でも決まってコーヒーが出される。コーヒーでお腹ががぶがぶになることもしばしばだ。コーヒーを飲みながら、政局の行方などタイムリーな話題について聞く。議員の方も、親しければ親しいほど奥深い話を聞かせてくれる。でも、大半は冗談話や世間話だが、最近はこれについてどう思うか？ など逆に意見を聞かれることもある。そうこうしているとすぐに時間が過ぎる。夕方の放送の時間が近づいてくると、そこからまた戦争状態となる。政局が動く、国会議事堂から中継することになる。国会議事堂内の中継場所を決められており、衆議院と参議院との境目、ちょうど真ん中の通路が中継場所だ。中継場所は国会議事堂の2階にあるが、この2階には幹事長室や国会対策委員長室など、各政党の司令塔となる幹部の部屋がずらりと並んでいる。また、自民党記者クラブなど各政党ごとに記者クラブがあるのだが、その場所も2階だ。

話そうと思うが話せない。声が出ない

夕方ニュースでレポートする記者を決めて、その原稿をチェックするのが私の役目だ。政局が動いていると刻々と情報が入ってくる。一番ホットな情報を入れなければならない。ということとは、いつも追い込み原稿となる。若い時は放送までに原稿を書けるかと、相当緊張したものだ。記者クラブから中継場所までだいたい30メートルくらいだが、いつも、ダッシュすることになる。昔、こういうことがあった。総理官邸での中継だったが、放送時間が変更になり急に中継が入ることになった。1分後に中継がきます。走るしかない。50メートルあまり走り、中継ポイントに到着したらすぐに質問が飛んできた。しかし、話そうと思うが話せない。声が出ないのだ。なぜかという、息が切れて話せないのだ。初めての経験だった。息が上がるとはこういうことなのか。落ち着くまでの時間の長かったこと。それ以来、中継の直前に全力疾走はしないように心がけるようになった。

夕方ニュースが終わると、私の出番がやってくる。ニュースステーションの中継の準備に入る。ニュースステーションのスタッフとどうい内容の中継にするかについて打ち合わせをする。だいたい2問2答だ。時間は2分程度しかもらえない。その中で、いかにわかりやすく解説できるかがポイントとなる。わかりやすいというのは先にも書いたが、正確な情報をどれくらい持っているかにかかっている。久米さんから「これは右ですか、左ですか」と聞かれ「右です」とはっ

きり答えられればいいのだが、政治の動きは複雑でそうそううまくはいかない。頭を悩ます時もしばしばだ。国会記者会館での中継の時は原稿を書く。それを中継を受けてくれるニュースデスクのスタッフに渡すのだ。スタッフはそれを見て、内容に合わせてうまく絵を入れてくれる。途中に「小泉総理はこう発言しています」とナレーションの音をふる時もあるが、その音生かしのタイミング、つまりきっかけとなる言葉、キーワードを事前に打ち合わせる。そうでないと、どこで入れていいかわからない。そのタイミングを間違うと（たまにそういう場面に出くわすこともあると思うが）、不体裁な画面となる。内容が十分に伝わらないことになるのだ。だから、すつきりとうまく放送が終わるとほっとする。ということは、事前の打ち合わせがいかに重要かということだ。ニュースデスクのスタッフは優秀な人が揃っているので、不体裁の画面となることは少ない。原稿はその内容によって書き上がる時間が変わる。難問の時は2時間くらいパソコンとにらめっことなる。通常は1時間くらいで話す内容を仕上げる。しかし、放送の直前に突然に情報が入ってくることもしばしばだ。「たった今、入った情報ですが……」と、その時はアドリブで話すことになる。記者を長くやっている、それも一つの楽しみであり、終わった後の充実感がまた格別だ。ある時は電話を片手に中継したこともあった。

中継の途中に電話が鳴ることもある。その時は電話に出たい。どういふ内容を伝えてきたのかとても気になる。でも、中継をやめて出るわけにはいかない。他のスタッフがいる時には、電話を受けた内容を書いてカメラの前に差し出してくれる。生中継の醍醐味だ。久米宏さんから打ち

合わせ通りの質問が飛んでくる。それに答える。中継が終わる。至福のひとつときだ。そして、冒頭に書いたように、ソファーへと向かうことになる。自分自身での反省会の始まりだ。自分で中継を振り返る。内容はどうだったか、きちんと伝わったか、早口ではなかったか、うまく話せたかなど頭の中をいろいろなことが、くるくると回っていく。中継がうまくいかなかったという結論に達すると、至福のひとつときが落ち込みのひとつときに一変するいっぺんことになる。だから、中継が終わると電話をしてくるニュースステーションのスタッフに「わかりやすかったですよ」と言われるのが一番、うれしい。

国会議事堂での中継やサミットなど外遊した時には、レポート原稿は書かないことにしている。スタッフにはこういう話をするからと口頭で伝える。原稿がないほうが話し言葉になり、自然な感じで内容が視聴者に伝わりやすいと思うからだ。しかし、「言うは易し」で生放送だ。間違いは許されない。原稿がないとなると中継での緊張感も高まる。頭が真っ白になればそれでおしまいだ。取り返しがつかない。そういうことが1回でもあれば『ニュースステーション』の中継は続けられない。場数ばかずが自信につながり、それが緊張感を超えたパワーをくれたのだと思う。それと、いかに話す内容を自分がわかっているかだ。内容がわかっている言葉は後からついてくる。それを長い経験の中で学んだと思う。

たまにスタジオで解説することがある。久米さんと直に会話ができて、しかも一言一言に相づちを打ってくれるしリアクションもしてくれるので、私自身はスタジオ出演が好きだし話しやす

い。

『ニュースステーション』の中継が終わると、政治家の家で取材してきた記者が国会記者会館に帰ってくる。そうした記者で一杯になる。電話で事前にポイントだけ聞いているが、もっと詳しい情報を一人一人から聞く。そして、朝ニュースの原稿作りに入るのだ。記者が全員返ってくるまでは国会記者会館から外へは出られない。つまり、自宅には帰れない。政治家が自宅に戻ってこず、午前2時頃に「どうしますか」と記者から連絡が入ることもある。また、こういうこともあった。記者が午前3時を過ぎても国会記者会館に戻ってこない。しかも、連絡もない。携帯電話を鳴らすが出ない。心配だったが、新米の記者だったので連絡を忘れて自宅に直行したのだからと思う国会記者会館を出た。次の日にその記者に「どうしたの」と聞いた。するとこういっ答えが帰ってきた。

「実は政治家が自宅に帰ってくるのをハイヤーの中で待っていたのですが、いつの間にか寝てしまいました。普通は運転手さんが起こしてくれるが、運転手さんも一緒に寝てしまい。目が覚めたら朝でした」

よっぽど疲れていたのだろう。

「三反園さんはごじお家に帰っているの」

記者とは聞こえはいいが、はつきり言って肉体労働だ。体力がなければ続かない。気合いと体

力が勝負だ。久米さんが予備校の学生さんに「マスコミは一に体力……」と言っていたのがわかっていただけだと思う。私が長く続けられるのは学生時代に野球をやって体を鍛えていたこと、そして、視聴者に政治の動きをわかりやすく伝えたいとの使命感が支えとなっていると思う。それと、何よりもこの仕事が好きだからだと思う。『ニュースステーション』の中継がうまくいき、午前1時頃に朝ニュースの原稿が書き終わるとハイな気分となり、それから記者たちと飲みに行くこともある。そうした時の酒はうまい。当然、口も滑らかになり、いつの間にか午前3時ということもしばしばだ。当然、次の日も『ニュースステーション』の中継と取材が待っているのだが……。

こんな一日では、視聴者から「いつ三反園さんはお家に帰っているの」との投書がくるのもうなずける。

『ニュースステーション』では久米さんとの会話の毎日だった私だが、コメンテーターになってからは国会記者会館よりも番組へのスタジオ出演が多くなった。

これまでに味わったことのない様々な発見がある。私にとっては新鮮で視聴者に語りかける時間も多くなった。

ただ、「お疲れさまでした」の一言が待っていることには変わりはない。

さて本書の主なテーマは、私の永田町を題材にした中継秘話と、テレビでは見られない『ニユ

「イースタレーション」の舞台裏である。

三反園「紙上中継」では、田中真紀子さんと『ニュースステーション』のエピソードと、「外務大臣就任と更迭」の深層を書きつづった。では私が『ニュースステーション』で中継をするまでの駆け出し時代を。ではニュースステーションの秘話と、20年に及ぶ政治取材のこぼれ話をいろいろ集めてみた。は今年で10年目を迎えることもあり、細川政権の誕生と崩壊のドラマを久米さんとのやりとりを交えて改めて検証した。最後は巻末スペシャルとして、これまで親しくさせていただいた政治家6人の方にインタビューした。

細川護熙さん、村山富市さん、羽田孜さん、森喜朗さんの歴代総理4人に加えて、石原慎太郎さん、安倍晋三さんという、今、注目の2人が、一冊の本の中で一緒に登場したのはおそらく初めてのことではないかと思う。

貴重な時間を割いていただいた6人の政治家の方々には、改めてここでお礼を申し上げます。